

## 29 広島原爆救護活動補遺

江川 義雄

原爆被爆後既に半世紀を経た。被爆災害とその影響は現在なお人類文化史上広汎な課題を投げかけている。

原爆症についての救護活動の記録や資料は多いが、それらの代表的文献としては昭和三十六年に発行された広島原爆医療史である。本書は広い展望の下に総括編集されたもので、原爆救護に関しては貴重な資料である。

その発行時より現在まで、臨床医学面でも次々と取組む分野も生じてきたし、本書になお未掲載であり、しかも後世に書き伝えねばならない項目について、少しでも補記しようと演者は試みたものである。

新型爆弾による大量被害への対応は、一瞬のうち都市消失という前代未聞の事変の故に、都市機能の停止となり、市内の大小の医療機関や当地区に駐留していた陸軍

部隊・警察組織・各種民間団体の活動が大パニックの下に、自らも受傷し、辛うじて生き残った人達により、治療とは言えないような救護活動が見られたのである。

演者は、そのごく一部ではあるが、現在も余り知れていない、重要と思われる事実を紹介指摘しようとするものである。当時水主町にあった広島県庁に隣接した広島県立病院は明治十年には広島医学学校の附属病院として、医学教育に貢献したし、医療機関としては医学学校消滅後も県下最高の権威をもち、県民一般により広く恩恵を与えて来たのである。被爆により広島県立病院（院長・石橋脩三）は全滅し、院長と看護婦若干名が奇蹟的に受傷生残りとなり、その救護活動の場を郊外の小学校に移転し治療を継続した。その間院長は焼跡より、白骨化した従業員六十五柱の骨を拾い戦災供養塔に合祀し、供養をつづけた仏心の篤い医師であった。

昭和二十年三月広島県立医学専門学校が、石橋院長をはじめとして各界の尽力によって認可され、県立病院をその附属病院とすることになった。幸運にも原爆投下の前夜、学校は高田郡小田村高林坊に疎開を終了し、全滅

を免れた事実を知るものは少い。

市内で鉄筋高層建築の病院は外形のみ残り、内部は全く廃虚と化した施設となっていた。爆心地に近い広島陸軍病院赤十字病院（院長・竹内鋌）は総員八百名中五十六名が死亡し、三百六十名が重軽傷者で、生存者は昼夜の別なき治療を続け、十二月に入る迄、当面の治療が継続された。放射線白血病研究者の重藤文夫副院長は地下室貯蔵のレ線フィルムの被爆をみて、原爆は放射線による被害と判断し、山脇卓壮医師の研究により、その実証がなされたことは有名である。

広島市の北部にあった広島通信病院（院長・蜂谷道彦）は通信関係の職域病院であつて、医療機関の全滅によつて、一般の市民や兵営が近在するところから軍人も大挙して救護を求めて殺到した。院長以下殆どの職員も受傷者であり、救護活動に従事した。

院長は被爆時からの記録を「ヒロシマ日記」に纏め、本書は好評で十数ヶ国語に翻訳刊行された。広島通信病院は岡山医大から派遣出張の医員も多く、岡大生四年生も救護活動に来広している。広島医専教授を兼任する玉

川忠太氏は病理解剖をはじめたり、勝部玄内科医師は「広島原子爆弾症に就て」最初の学術論文をどん底の生活環境から発表している。このように苦心し、真実探求の成果は米占領軍の報道管制により公開される事は出来なかつた。原爆症の病理学的解明と臨床治療面への助言があれば、どれだけの人命を救い得たか悔まれてしかたがない。

開業医での活動は医師会関係刊物に、多く寄せられているところである。原爆放射能は被爆者に将来ガン発生をおこし易くする不明の素因を与えるという論文を書いた於保源作医師は有名である。河村虎太郎医師は韓国被曝者一万五千名に心を傷め、韓国における原爆被曝者に巡回診療団を組織し、広島日赤の石田医師と検診されていたが、先年物故されたことは誠に残念痛恨事であつた。検診、救護活動も対米被曝者に実施され、更にグロ―バルな観点から、IPPNWの普及は人類の未来史の課題として注目されつつあることは原爆被爆犠牲者へのせめてもの鎮魂と言うべきであろう。

（廿日市市）